【概要】

多言語的なアメリカとハーン

西　成彦

私はポーランド文学の研究からスタートした比較文学徒だが、学生時代に関心を持ったポーランド作家（ヴィトルド・ゴンブローヴィチと、ポーランド出身のイディッシュ語作家、アイザック・バシェヴィス・シンガー）がいずれもアメリカ大陸（ゴンブローヴィチはアルゼンチン、シンガーは米国）へと移住した作家だったために、大きな意味での「（南北）アメリカ（大陸）文学」のなかに、こうした東欧系作家の作品群（それもポーランド語やイディッシュ語で書き残したもの）をどう位置づけるかについて考えないでは済まされなくなった。結果的に、この問題を考えるにあたって、日本人移民が「アメリカ」で書き上げた「移民文学」をどう位置づけるかという問題をも避けては通れず、現在は『アメリカ大陸文学論』（仮題）なるものを構想中だが、その構想を練るなかで、ローレンス・ローゼンヴァルトの『多言語的なアメリカ』*Multilingual America*（2008）という刺激的な本に出会った。「アメリカ」とは言っても「米国」のみを取り上げたものではあるが、「英語文学」のコーパスを中心にしてできあがっている「米文学」のなかで、「非＝英語」の痕跡がどのような形で刻みこまれているかを子細に検討した研究書で、そこでは次の 3 種類の「非＝英語」が考察の対象とされている。

１）フェニモア・クーパーの小説などに登場する先住民族の言語。

２）ルイジアナ併合後、「北部」の文化への同化を強いられるようになったルイジアナ周辺のフランス語（ケイジャン語やフレンチ・クレオールなどの方言を含む）。

３）19 世紀後半になって加速した新移民の言語のなかで、とりわけ東欧ユダヤ人の言語であったイディッシュ語。

私は、このローゼンヴァルドの思考枠組みから強い刺激を受け、特に明治維新から敗戦期までの「日本語文学」を考えるときにも、北海道先住民族であったアイヌの言語や、台湾・朝鮮半島・ミクロネシア・満洲などの現地語、さらには植民地から内地へと移り住んだ渡来者が持ちこんだ異言語（植民地の現地語）が、日本語とのあいだでどのような隣接関係を生きたかに注目するようになった。『バイリンガルな夢と憂鬱』（人文書院、2014）は、さらに北米日本人の「移民文学」のことまで意識しながら書き上げた、私なりの「多言語的な日本文学」とでも名づけうる試みだった。

今日は、こうした見取り図のなかにラフカディオ・ハーン（1850-1904）の言語遍歴を置きたいと思っている。じつはローゼンヴァルトの『多言語的なアメリカ』のなかでも、ハーンの名前は「ルイジアナの英語文学」を論じた章のなかに登場するのである。そして、そんなハーン

が明治日本にやってきた後、近代的な日本の作家や知識人は、異言語との隣接関係を日本文学のモチーフとして取りこむにあたって、ハーンから何を学んだか、ゆくゆくはそこまで考えたいと思っており、その話も最後に少ししておきたい。

◆

生れた当時は英領イオニア群島に属していたレフカダ生れのハーンにとって、「母語」（＝母の言語）と呼びうる言語は、近代ギリシャ（ロマイック）語、もしくはイタリア語のイオニア方言であったが、二歳でアイルランドに移り住み、4 歳で母と生き別れた彼のなかで、これらの「母語」が言語能力としては生き延びることはなかった。

逆に、ダブリンのハーン家で彼が身につけたのは、もっぱら英語で、アイルランド南部やウェールズあたりで、いわゆる「ゲール系の言語」に触れることはあったにしても、それは生涯を通じて、「ケルト的なもの」に対する知的関心を支える以上の役割を果たしたわけではなさそうだ。

そして、これは今なお謎に包まれている伝記的な事柄だが、1869 年の渡米の段階で、彼はフランス文学を読みこなし、それを熟練された英語に訳せるほどのフランス語能力を身につけていた。このことが米国での彼の成功にあたっては大きな意味を持ち、オハイオ州シンシナーティ（そこでの彼はドイツ系移民のドイツ語などに触れた可能性もある）からルイジアナ州ニューオーリンズに移り住んで後、現地のフランス語系諸言語に通暁して、ついにはカリブ海クレオール・フレンチの本場であったマルチニックに出かけ、『仏領西インドの二年間』*Two Years in the French West Indies*（1890）を書くに至るのである。ハーンがルイジアナ・クレオールを「母語」とするフランス語詩人、アドリアン・ルーケットとのあいだに結んだ友情については、『比較文学究』第 61 号（東大比較文学会、1992）所収の「ハーンとマゾッホ」（『耳の悦楽』紀伊國屋書店、2004 には「ザッヘル＝マゾッホ偏愛」として再録）のなかで触れたことがあるので、それらを参照されたい。

ともあれ、こうした言語遍歴を経て、日本にやってきたハーンは、家庭を設けることになるセツたちとは、「ヘルンさん言葉」というピジン日本語で日常を営み、他方、職場では日本のインテリの卵たちと「和製英語」を介して、交流を深め、そうした交流の成果として「英語教師の日記から」From the Diary of an English Teacher や「九州の学生と共に」With Kyushu Students などのエッセイを書くようになる。14 年間の日本滞在期間中に、ハーンはまさに英語と日本語の「はざま」でフィールドワークをおこない、その成果を英語で世に問うたのだ。日本は米国の植民地ではなかったが、英語帝国主義が圧倒的な影響力を世界的に行使しつつある今日からふり返れば、19 世紀末の日本は、すでに「英語圏の周辺」に位置していたとも考えられるだろう。そして、ルイジアナ時代に「フランス語系諸語」の衰退（それこそ『欲望という名の電車』の主人公、ブランシュが「ブランチ」としか呼ばれなくなっていく運命）を嘆いた

ように、ハーンは日本人が日本語を手放すことはあってはならないと、英語を使いながらも、教壇から説いたのだった。帝国主義の暴力のお先棒を担ぐしかない自分の立場をわきまえつつも、その暴力が「現地文化」の圧殺にまで加担することへの警戒心、それが西洋人ハーンの「良心」だった。

◆

日本の大正から昭和にかけては、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）という「エキセントリックな西洋人」から感化を受けた文化人が日本に続々と登場した時代である。なかでも萩原朔太郎（1886-1942）と並んで、その影響が大きかったと言われる佐藤春夫（1892-1964）に関しては、『國文學』1998 年 7 月号に中村三代司氏の「佐藤春夫とハーン」という論文が載っているので、ぜひこれを参照していただきたいが、私は前に触れた『バイリンガルな夢と憂鬱』所収の「植民地の多言語状況と小説の一言語使用」のなかで、1920 年の台湾旅行に取材にした作品群を通して佐藤春夫が試みたことは、ルイジアナ時代のハーンのそれに近いと記した。ハーンが英語で書いたのに呼応するように、佐藤春夫は日本語で書いたのだが、そうした帝国主義的な言語の侵入や浸透を前にして、現地の諸言語（「国語」としての標準化がなされないままの諸方言）が「失われゆく文化」の指標としてクローズアップされる。「女誡扇綺譚」では「厦門の言葉」や「泉州語」、「霧社」ではタイヤルやセデックといった「台湾原住民」の言葉が、その存在感を誇るようにして、独特のエキゾティシズムを発散しているのである。

また、台湾の内地人作家、西川満（1908-99）と池田敏雄（1916-81）が編んだ『華麗島民話集』（1942）は、マルチニークや日本でおこなったハーンの再話（時として採話を含む）と結びつけて考えることが可能だろう。グリム兄弟や柳田国男が「国民文化」構築のためにおこなった再話ではなく、「植民地支配」の暴力性を意識しつつも、「失われゆくもの」を野放しにはすまいという思いからなしとげられた「人類学的探究」とも呼ばれうる作業である。

そして、そうした民俗学や人類学という分野まで念頭に入れたとき、戦後の日本で文化人類学の学術的基礎を固めた泉靖一（1915-70）が、若き日、京城帝国大学の学生だった時代に書き残した小説は、ハーンの影響を受けたものであったかどうかは別にして、まさに「日本のハーン」が植民地朝鮮で行ったフィールドワークとしても捉えられるように思う。

アルピニストだった泉は、済州島の最高峰である漢拏山を含め、朝鮮の山々を歩きまわったらしいが、北部朝鮮の山間で耳にした話をもとにして、彼は京城帝国大学の学生雑誌『城大文学』に「五番目の叔父（タソツエアザツシ）」という小説を寄せている。

——で、どうして帰って来た？

——山が恋しくなつたからさ。いや詳しく話せばかうなんだ。海へ出て二年目にカルボの桃花（トウハー）と云ふ女を見付けて、漁から帰つて来ると一緒に生活してゐたが、つい

十日前、船が難破して四月も早く帰つてみたら、畜生、俺からたんまり留守居賃を取つて置きながら外の男を作つてえやがる。これには、むかつ腹が立つて殺（バラ）してやらうかと思つたが、その途端に焼け切れたやうなカルボの野郎が憎らしくなった。

（『城大文学』2 巻 4 号、1936）

1930 年代には、朝鮮人のなかからも日本語、および朝鮮語を用いる作家が続々と登場し、芥川賞候補にまで名前の挙がった金史良（1914-50）にも火田民を扱った「草深し」という有名な作品がある。つまり、ゆくゆくは、帝国の言語（英語や日本語）であれ、現地語でであれ、現地の知的エリートが文学的素材として拾い上げるにちがいないものを、帝国の知的エリートは、先走るようにして、一種の「ローカルカラー」なるものを文学的に定着させたのである。そうした事例として、泉靖一のケースなどは、ハーンの場合と同じように受け止めることができる。

私たちが日本でハーンという稀代の表現者の功績を値踏みしようという時に、はたして日本もまた「ハーン」を産み出したのかどうか、という問いを粘り強く問い続けていくことは重要だと思う。「帝国の言語」は、絶えず「周縁部」に「異言語」を「ローカルカラー」の主たる要素として配置するものだからである。